

人権保育専門講座4

テーマ 「障がいのある子どもとの共生保育」

『『障害』ではなく、子どもをまるごと見ましょう』

特別支援学校北勢きらら学園 米本 俊哉 さん

人権保育専門講座4は、県立特別支援学校北勢きらら学園の 米本俊哉 さんに、「障がいのある子どもとの共生保育」をテーマに、熊野、志摩、伊賀の3会場でご講演いただき、計115名の方にご参加いただきました。

今、保育・教育の現場では、発達障害などさまざまな障がいについて研修する機会が増えています。子どもたちのことを理解するためには、障がいにかかわる専門的な知識理解は当然必要です。しかし、知識だけに頼って子どもをみてしまうと、「この子がこんな行動をするのは、『障がい』があるからなのだ」というような決めつけにつながってしまう場合があります。

私たちは、同和保育の取組から、子どもの「気になる行動の意味」に迫ろうとするときに、その子の生活背景や生育歴など子どもをまるごと捉えることを大切にしてきました。米本さんからは、そうした同和保育の視点をふまえて、子どもの見方や家庭とのかかわり等についてお話をいただきました。



米本さんのお話から

【以下、文中の語句表記は、基本的に講師資料に従います】

◆「発達障害」と考えられる子ども、全国の小中学生で推計61万4000人◆

文科省が2012年にある調査結果を発表しました。それは、「発達障害」と考えられる子どもの推計が、全国の小中学生で61万4000人であった、というものです。この数は、普通学級に通う公立小中学生のおよそ6.5%にあたります。つまり、1クラス40人学級とするとそのなかの2～3人が、「読み・書き」が苦手だったり、授業に集中できなかったりするなど課題を抱えていることとなります。調査によると、このうち約4割の子どもが、特別な支援を受けていないとのことでした。

みなさんが日々かかわっている教室で、例えばこのような行動を教室でみせる子どもはいませんか？

- ちょっとしたことでもまわりから、意地悪をされたと思ってしまう
- 自分の行動を認めず、言い訳をする
- 一度主張をし始めるとなかなか自分の考えを変えない
- 他のことが気になって教師の話を最後まで聞けない
- 何かにこだわり、活動の切り替えができない
- 質問の意図とずれている発言がよくある

- 相手がいやがることを平気で言うてしまう
- 忘れ物や落とし物が多い・・・

こうした子どもたちがみせる特性には、学習障害、注意欠陥多動性障害、高機能自閉症、アスペルガー症候群…などの発達障害が理由として考えられます。そこで、保育・教育の現場では、発達障害についての研修機会が増えています。

もちろん、子どものことを理解するためには、障害にかかわる専門的な知識理解は必要です。しかし、そうした知識に頼りすぎてしまうのは、注意しなければなりません。

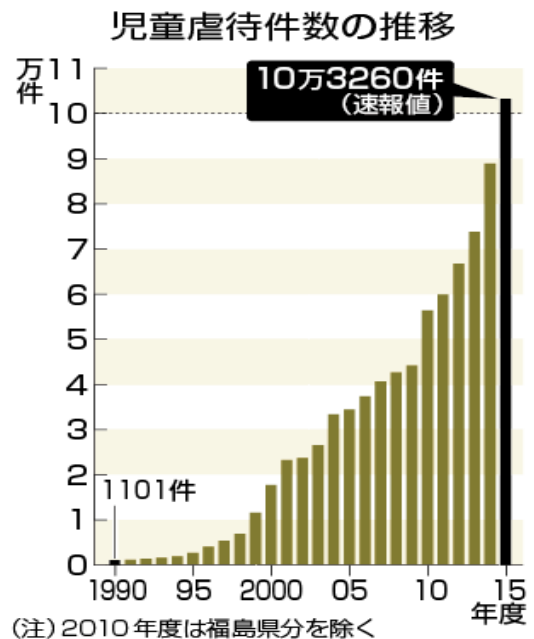
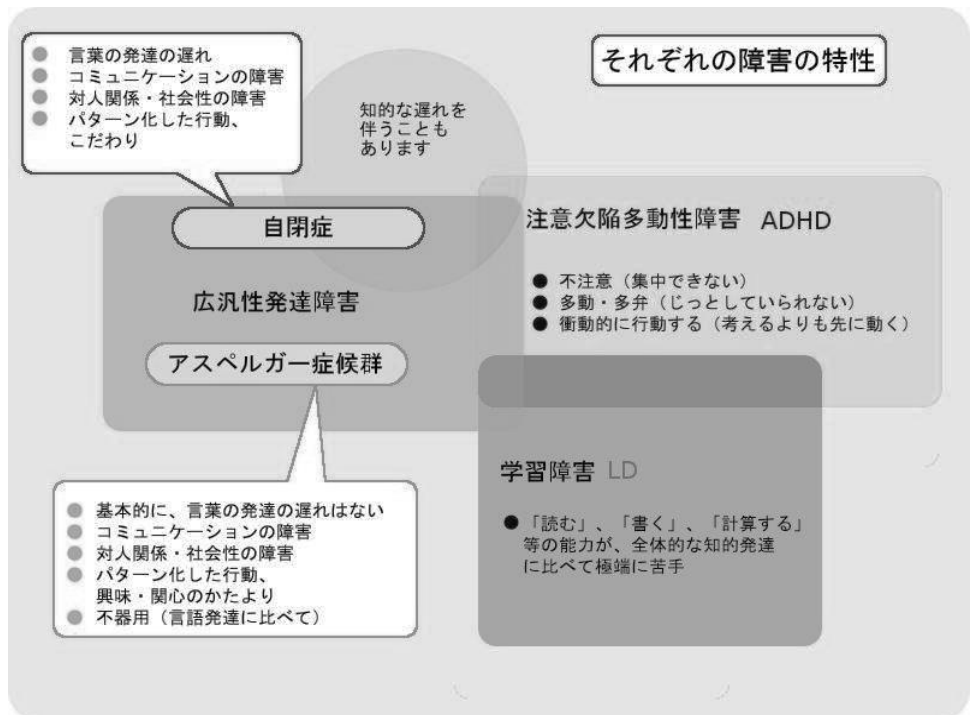
なぜ注意しなければならないのか、その理由を「愛着障害」から考えたいと思います。

◆子どもの姿をみて、すぐに「発達障害」と捉えることは危険！◆

子どもへの虐待は、保育現場にとって喫緊の課題となっています。厚労省の調査結果によると、昨年度、児童相談所に寄せられた虐待相談件数は、全国で10万件を超えました。ここ25年連続で過去最多を更新しています。みなさんも、日々の保育活動をとおして注意深く子どもの様子をみていることかと思えます。

虐待は、子どもたちの発達に非常に深刻な影響を与えます。虐待が脳の発達に影響を及ぼし、知的障害になる子どももいます。そして、虐待によって引き起こされることのひとつが「愛着障害」です。

この愛着障害は、乳幼児期に長期にわたって虐待やネグレクト等によって保護者との安定した愛着（愛着を深める行動）が絶たれ、「自分は大切にされている」と感じる事が十分できなかったことによって引き起こされます。愛着障害に陥った子どもは、衝動的・過敏行動的・反抗的・破壊的な行動がみられるようになります。また、表現力・自尊心・相手に対する尊敬心・責任感などが欠如していたり、他人とうまく関わることができなかつたりする傾向もみられます。また、すぐキレたり、多重人格をみせた



りする「解離現象」もみられます。

ところで、私は以前からこの「愛着障害」というものを注目していました。それは、愛着障害の子がみせる特性が、アスペルガー症候群や注意欠如多動性障害と重なるところが多いからです。

それぞれの特性をみてみましょう。

注意欠如多動性障害の子どもの特徴

席につけない／席についていてもごそごそする／教室の中を動き回る／姿勢が悪い／他の子にちょっかいを出す／宿題を忘れる／課題ができない／学用品をなくす／友達と約束を守れない／些細なことでキレル…。

愛着障害の子どもの特徴

人とうまくつきあえない／授業中によそ事をしゃべる／教室を出て行く／消しゴムを投げる／友達のいやがることをする／宿題をしない／注意するとキレル／うそをつく…。

非常に共通した傾向があることがわかります。

私がなぜこの二つを比較したかということ、「教室でみせる子どもの行動の要因というものは、『発達障害』によるものなのか、『愛着障害』によるものなのかは、すぐにはわからない」ということを言いたいからです。

発達障害は、先天的な要因が関係しています。一方で、愛着障害は後天的なものであり、子どもがくらしている生活環境や家族との人間関係が大きく影響しています。私は、このちがいにこだわらなければならないと考えています。

例えば、子どもに何か気になる行動がみられたとします。そのときに、関わる職員が「この子がこんな行動をするのは、きっと〇〇という発達障害があるからなのだ」と決めつけをしてしまったとします。しかし、その行動のわけが、実は保護者との関係に基づく愛着障害であったとすれば、到底子どものことを理解しているとは言えませんよね。

「『障害』を理解するのではなく、子どもをまるごと理解しましょう」ということです。

◆家庭訪問で見える世界◆

さて、「虐待」と聞いて、みなさんはどのようなことを連想するでしょうか。多くの方が暴力をふるうというような身体的虐待や、育児放棄をするネグレクトを真っ先に思い浮かべられるのではないかと思います。しかし、それらの虐待は、いわば極端な事例です。今回取り上げたいのは、極端なまではいかない、「中間の虐待」です。例えば、

- 放任 • 過保護
- 過干渉 • 過プレッシャー
- きょうだい間での育ての違い

などです。愛着障害は、まさにそうした「中間の虐待」によって引き起こされると考えられています。子どもが「親から愛されていない」と感じてしまっている状況を、そのまま放置してしまうことで愛着障害となるのです。



身体的虐待やネグレクトは比較的周囲が気づくことができるのですが、「中間の虐待」はなかなか気づきにくいものです。子どもを愛着障害にさせる家庭状況は、単に教室の子どもの姿を注意深くみただけでは、つかむことができません。

そこで、家庭訪問が非常に重要となります。

家庭訪問にまつわる経験を一つ紹介します。私は小学校の現場で勤めていたことがあります。ある年の5月、年間の定例として、家庭訪問を行いました。ある家庭を訪問したとき、玄関で母親と話をしました。私はその時点では、何か特別な課題を感じるわけではありませんでした。ところが、やがて教室にいるその子の臭いが目立つようになりました。また、着ている服に手入れがされていないことに気づきました。私は、この子のことをもっと知りたいと思い、子どもと家庭での生活状況を会話しながら確認していきました。子どもの話から、この家庭に重大な問題があることがわかってきたので、私は再度家庭訪問をしました。今度は玄関ではなく、家の中に半ば強引に上り込みました。すると、きれいに整頓された玄関とは違って、家の中は実に大変な状況になっていました。母親は、家の中の問題を知られないように、私を玄関だけで返していたのです。もし年度当初の定例の家庭訪問だけで終わらせていたら、子どもがおかれていた厳しい状況に気づくことができなかつたと思います。

みなさんが、もし教室のなかで気になる行動をみせる子どもと出会ったら、すぐに発達障害と決めつけることはしないでください。愛着障害の場合もしっかり想定して、その子の家庭状況に何か課題があるかもしれないという可能性を探るべきです。とりわけ、家庭訪問をとおして「過保護」「過干渉」「きょうだい間の育ての違い」などの課題がないか、子どもとじっくり話をしながら、注意深くていねいに生活状況を追わなければならないと思います。



◆虐待の背景にある課題（保護者支援について）◆

なぜ、こんなにも虐待が増えてきたのでしょうか？「無責任な親が増えてきた」ということで片づけるのではなく、「社会的な状況が虐待に向かわせている」と捉えるべきでしょう。

その要因はさまざま考えられます。

【虐待を引き起こす要因として考えられる保護者の状況】

- 子どもの存在や子育ての優先順位の変化
- 周囲からの孤立（相談する人がいない）
- 対人関係能力の低下
- 経済的ストレス（貧困）
- 親の子育てストレス（育て方がわからない）
- 多忙感（ワーキングプア）

親がこのような状況にあって子どものことを放ってしまっていたとき、子どもは愛着障害に向かってしまいます。しかし、愛着障害は突然なるものではありません。赤ちゃん時代から長い期間かけて少しずつその兆候をみせています。

- 定位行動→子どもが愛着を求める者をじっと見つめている
- 信号行動→泣き声を上げるなどして愛着を求める者の関心を自分に向けようとする。
- 接近行動→はいはいやよちよち歩きで愛着を求める者に近づいていく。

このような行動で子どもは一生懸命メッセージを発しているのです。ところが、愛着を求められている親は、さまざまな事情によって、子どものメッセージを見逃してしまうのです。

そのような状況を変えることができるのは、保育士や教師です。子どもは、「先生から愛されている」と実感できると一定の安定を示します。だから保育士や教師は、たっぴりと子どもに愛情を示したいところです。子どもにかかわる周りのおとなのこのような役割を、「心の中の親」と呼びます。

保育士や教師がすることは、子どもが不安にならないよう「ここは安全だよ」と伝えることです。そうすることで子どもは、自分の前に愛着者がいなくても、イメージが心の中にあるようになります。「心の中の親」のまなざしがあることで、子どもはだんだん愛着を求め親から離れることができるのです。

しかし、この役割は（特に保育士は）とても大変です。なぜならば、3歳前後というのは第一次反抗期にあるからです。この時期の子どもたちは手加減せずに反抗します。なかでも、愛着障害に向かっている子どもは、先生に対して試し行動をとってきます。これは、愛情要求の裏返しからくる行動です。教師の前にやってきて突然「先生なんて大キライ！」と言ったりします。しかし、子どものこの行動の意味は、「先生、私を大事にしてね」です。普段、「あなたのこと好きだよ」というメッセージを受けたことがないことで生じさせている現象です。

先生のなかには、子どもの「大キライ！」を文字通りに捉えて、怒る人もいるかもしれませんね。そうではなく、子どものメッセージの真意を受けとめて、「先生は、あなたのことを大事に思っているよ」というメッセージを子どもに届けることが大切です。試し行動をする子には、他の子よりも多くこうした声かけをし、いいことを見つけたら褒める。それも、多くの先生から…。大変なことであるのはよく承知していますが、それでも愛着障害に向かっている子どもにとっては、本当に必要なことなのです。



そして、園をあげて手を尽くしたいのが、その子の家庭環境を変えるということです。つまり、親子関係を改善させることです。

子どもが愛着障害に向かうことを防ぐ一番の方法は、親が子どもに「あなたは大切な子だよ」と示すことです。特に子どもをハグすることです。しかし、厳しい状況に置かれている親が、自律的に子どもへの態度を変えることは難しいでしょう。そうすると、だれかが親を支えなければならない。それが、保育士や教師なのです。

よく「保護者と連携した子育て」などと言いますが、愛着障害に向かわせている保護者に関しては、横並びの関係がよいとは限りません。必要なのは親への「支援」なのです。

家庭環境を変える

親と連携ではなく、親を支援へしんどさを共感、がんばりを褒める、できることを具体的に言う、指導的な姿勢から脱却
そして、**親子関係の調整**を



では、どのようにして親を支えるとよいのでしょうか。ポイントとなることを3点あげます。

- ① 指導的な姿勢ではなく、親のしんどさに共感する
- ② その親ができることを具体的に教える
- ③ その親ががんばっていることを褒める

家庭内の状況を変えることは、本当に難しいことだと思いますが、しかし放っておいてはだめなのです。

あるAさんのケースで考えてみましょう。

【事例】「Aさんのケース」

Aさんは幼児期に誰にでもべたべたしていく態度がみられた。診療機関でみてもらうと「愛着障害」と診断された。

小学1年生になったら、今度は集団になじめない。診療機関でみてもらうと、今度は「ADHD」と診断された。

小学5年生になると、うそが多くなり、万引きや窃盗を起こしてしまう。診療機関でみてもらうと「行為障害」と診断された。

青年期に入ったAさんは、犯罪に手を染めてしまった。その時は「反社会性自覚症」と診断された。

Aさんがみせる気になる行動の特徴は、幼児期にすでに保育士が気づいていたのです。医療機関に連れて行くべきだと保護者に伝えるまではしました。しかし、それだけで終わってしまったことが、その後のAさんの人生に大きな影響を与えたのです。

先生方は、いち早く子どもの異変に気がつきます。他の子どもたちとすぐに比べられる状況にあるから、その子の特徴が目立つからです。だからこそ、先生方が担う役割は大変重要なのです。

みなさん、子どもたちにたっぷり愛情を伝えてください。

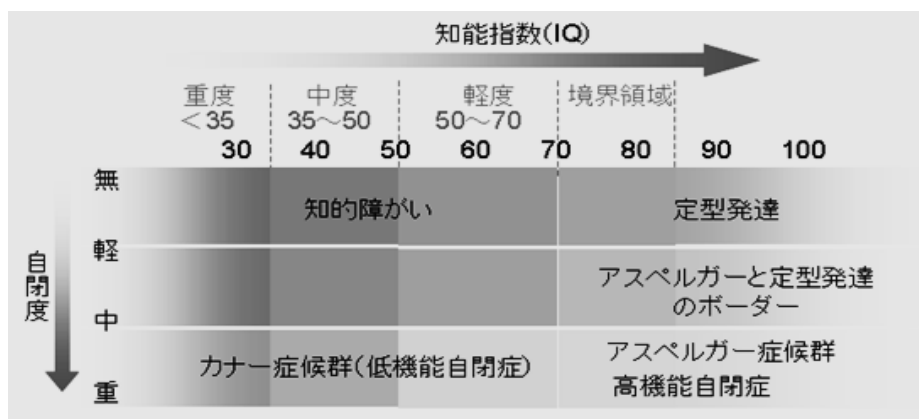
そして、家庭環境を変える必要があるならば、できる限りの手を尽くしてください。

◆障害は特別なものではない◆

私たちの社会には、様々な身体的・精神的な特性があって、家庭環境もさまざまです。そうした多様性のある社会こそがあるべき姿ではないかと考えます。

私たちは、「障害のスペクトラム」の中のどこかに位置付いていると自覚するべきです。だれしも個性があり、その人なりの独特なものの見方や考え方、感じ方がありますよね。障害があるかないかという二分論では片付かないものなのです。

【障害のスペクトラム】



障害のある子どもを「できない子」と捉えてはなりません。たしかに、たいていの人にとっては大丈夫なことであっても、「それはいやだな」と人一倍強く感じてしまうこともあります。しかし、障害のある子どもで、他者より優れているものを持っている子もたくさんいます。



◆子どもたちが生きる世界（教室でみせるさまざまな特性）◆

行動の背景には必ず理由があります。子どもたちがみせる行動の意味を、私たちはできるだけ理解するべきです。

思い出してください。あなたのクラスにこんな子はいませんでしたか？

- 黒板をノートに写し取るのに時間がかかる子
- ノートのマスから文字がはみ出してしまう子
- 本読みがつまりつまりでしか読めない子

きっといたことと思います。では、その子たちに、どのような声かけをしていましたか？

ここからは、子どもたちが教室でみせる姿について、発達障害にみられる特性を中心に整理し、教職員のかかわり方について考えたいと思います。

（１）視覚的な情報で考える子ども

言語による情報処理が苦手で、視覚をとおして「画像」として記憶することで情報処理をする子どもがいます。

【子どもがみせる姿】

- 視覚をとおして記憶された情報が精密、正確、詳細である
- しかし、応用がきかない

【教職員のかかわり】

○視覚的に伝える（絵カードの利用）

- 口頭で注意しても理解できない。例えば、注意をしたいときには、怒っているイラストのカードを示すと理解を示すようになる。

（２）注意の向け方がとても狭くて強い

授業中の様々な音が気になってしまう子どもがいます。多くの子どもは、先生が話しているときは「今、重要なのは先生の声」として、それ以外の音をシャットアウトすることができます。しかし、それができないのです。その結果、先生から「話に集中しなさい」といって叱られてしまいます。

【子どもがみせる姿】

- 細かい部分をとらえることが得意（人が気づかないところに気づける）
- しかし、全体をとらえることは難しい（「木を見て森を見ず」）。
- 全体のつながりを意識しないので、何が重要なのかわかりにくい。

【教職員のかかわり】

○その子が注意を向けていた部分を取りあげる（その子の気づきを放置しない）

(3) 何かを実行したり解決したりすることが苦手

【子どもがみせる姿】

- 予定変更で混乱する
- みんなと同じところを注視することが難しい
- 何かを人と一緒にすることが苦手

【教職員のかかわり】

- 教室環境を配慮する。情報を少なくし、整理された環境をつくる



(4) 感覚や刺激に偏りがある

【子どもがみせる姿】

- 味覚、聴覚、視覚に特性があり集中を妨げる
- すべてのものが体に入り込んでしまい、情報処理が追いつかず混乱する
- 一つのことに集中してしまい他を見落としてしまう
- 「集中できない」から「実力が発揮できない」

【教職員のかかわり】

- 指示は、短く、区切り、わかりやすくし、一度に提示する情報量を必要最小限にとどめる。
- イヤーマフ、サングラス、ヘッドホンなどの器具も活用する。

◆さまざまな子どもたちが共生する教室をつくる◆

ある授業中のことです。担任の先生が、授業の導入として海水浴場のイラストを子どもたちにみせました。そのイラストにはたくさんの人たちの姿が描かれています。先生は子ども達に「これは何の絵ですか？」と尋ねました。先生としては、授業展開として「海水浴の風景です」と言ってほしいと考えていました。ところが、そのとき手を挙げて答えた子は「これはスイカの絵です」と答えました。先生はその回答に対して、「え？スイカ？これ、スイカの絵ですか？ちがいますよ」と笑いながら注意しました。教室の子どもたちも笑いました。答えた子はうつむいて黙りました…。



実はこのイラストの中に、小さくスミの方にスイカの絵が描かれていたのです。その子の注意はそちらに向けられていたのです。上に示したイラストをみて、「スイカの絵」と答える人はおそらくほとんどいないでしょう。その子のもつ特性だったのです。ところが、先生の方は、イラストの中にあるスイカに気づいていなかったのか、子どもの回答を否定してしまったわけです。そしてあろうことか、笑いものにしてしまったのです。

実は、これに似たことを、多くの場面で起こしてしまっているのではないのでしょうか。

その子のもつ特徴が、周囲から笑われてしまう…。そうした体験が積み重なっていくうちに、子どもはどんどん自尊心を低下させてしまうのです。

障害者差別解消法の施行もあって、「合理的配慮」が注目されました。その一環として「ユニバーサルデザインの授業づくり」という言葉もよく聞かれるようになりました。

とは言え、「合理的配慮」とか「ユニバーサルデザインの授業づくり」と聞いても、具体的にどのようなものかイメージできない先生もみえるかもしれません。みなさんの現場では、障害者差別解消法の施行によって、何が変わりましたか？いろいろな方から話をきいてみるのですが、どうやらあまり考えられていないように感じます。

私は、非常にシンプルに考えていて、「さまざまな特徴のある子がいることを『当然』として、それぞれの子どもの反応を大切に、自分の価値観を押し付けない」ことがユニバーサルデザインの授業だと考えています。例えば、先ほどの海水浴のイラストの事例でしたら、「スイカの絵です」という答えに対して「え?! ホント?! どうしてスイカ?」ではなく、「あ!ほんとだ! こんなところにスイカがあるね!」という反応するとよいかもしれません。その時のやり取り次第で、その後の授業展開を組み替えて、予定を変更してもいいでしょう。

「合理的配慮」は、「相手の主張に対して『それは無理』と拒絶することはやめよう。『どうしたらできるだろう』といっしょに考えましょう」ということです。

一つ例え話をします。

ある家族が春先に長期の家族旅行に出かけました。一週間して家に帰ってきたときに、小学1年生の子どもが「ここは僕の家じゃない!」と言って混乱しました。その子は、花壇に花が咲いているのを見つけたのです。その子の記憶では、我が家の花壇には花が咲いてなかったのです。これは自閉症の特徴である、全体をとらえることの困難さと注意の向け方がとても狭くて強いということが影響しています。

さて、みなさんならどういう返しをしますか？



してはいけない対応は、「何を言ってるの。ここはあなたの家でしょ」と言って無理やり腕をひっぱって家に入ることです。

大切なのは、決して否定するのではなく、その子の意見を尊重することです。例えば、「そうかあ。花が咲いてるのが気になったんやね。じゃあ、ちょっと別のところに行こうか」と言って、しばらく周囲をドライブし、暗くなって花壇がみえなくなってから家に入る…という方法もあるでしょう。その子の注意がどこに向いているかを注意深くみて、柔軟に対応することが大切です。しかも、ちょっとドライブの時間が伸びるから、また楽しいことがあるかもしれませんよね。

子どもの特徴を特別視するのではなく、共にできる道筋を考えること。発達障害など行動に特徴がみられる子どもたちにかかわるうえで、とても大切な認識です。

子どもに対するかかわりかたによって、子どもの育ちや進路が大きく変わります。一つ事例を紹介します。

ADHDの子がいました。その子は小さい頃からしょっちゅう怒られていました。というのも授業中に何もせずぼーっとしてしまっているようにみえるのです。「おい!話を聞いてないだろ!」と授業中に先生から何度も注意されていました。

その子は、ぼーっとしていたのではありません。別なことを考えるのに一生懸命だったのです。その子から聞き取りをしてみると、頭の中で瞬間的に連想ゲームをしてしまっただけです。

【その子が頭の中で考えていること】

○先生がしゃべっているなあ

→おや、隣の子が筆箱を落としたぞ。拾ってあげよう

→なんかこのポーズ、バスケのドリブルをしているみたい

→さっきの体育のバスケのシュート、うまかったなあ…次もがんばるぞ

→あれ、先生が僕をみている。そうか授業中だったんだ

→わあ、当てられてしまった。まずい。今、何ページかわからないぞ

○先生がしゃべっているなあ

→窓の外の木が揺れているぞ

→こないだ旅行に行ったときも木が揺れてたなあ

→思い出すなあ。森のにおい、山の景色、電車の音…

→やばい、気づいたらもう10分経ってる。今、どこやってるんだ？



このような思考だったそうです。先生から毎日のように注意されていたのです。やがて、先生からは「すぐサボる子、集中できない子」と見なされてしまいました…。

これでは、自尊心が低下するのも当然です。このように、保育や教育の場で劣等感や不安感のなかで苦しんでいる子どもたちがいるのです。

ADHDの子どもは、脳内で「ドーパミン」と「ノルアドレナリン」の二つのタンパク質が不足しています。実はドーパミンというのは、褒められたり、楽しくなったりすると分泌が盛んになります。だから、「褒める」「認める」ということが人一倍必要なのですね。また、ノルアドレナリンは、緊張状態で分泌が盛んになるものですから、「この子はできない」と言って放置せずに、その子の力を信じて尊重することが重要なのです。

◆スーパーティーチャーは必要ない◆

発達障害の子どもたちは、他の人より優れた能力を発揮できる可能性をもっています。高度な専門性を発揮することも多く、有名人も多くいます。それなのに、存在や感性を否定し続けると、その可能性を摘み取ってしまいます。

その子のことを尊重する人との出会い、とりわけ先生との出会いが、その子の人生を変えるのです。

私は、障害のある子どもとかわるときに、専門性に頼りすぎないようにしています。専門的な知識をとおして子どもを分析するのではなく、その子をその子としてありのままに受けとめることが何より大切だと考えています。

ある事例です。小学校の先生が、「自分のクラスには、5人の発達障害の子がいる」と捉えました。そして、発達障害についての知識を蓄えようと一生懸命、講習を受け、教えられたとおりの方法を取り入れて対応しようと思いました。しかし、そうしている間に子どもたちの問題行動や荒れがすすみ、「子どもたちに振り回されている自分はダメ教師だ」と自尊心を低下させ、学校で孤立感を抱くようになりました。ついに、子どもへの支援に対する熱を失ってしまい「もう、どうでもいいや」と学年末までの時間をやり過ごしてしまいました…。

このように先生があきらめてしまうと、子どもはそれを察知して「見捨てられ感」を抱きます。そして、「この先生は、何をしても怒らないぞ」といって問題行動がエスカレートし、他の子にも影響が生じ、ついにはクラス全体が荒れてしまうのです。とっても残念な話ですよ。

この事例の問題点は、子どものことを発達障害として特別視したところにあるのではないかと考えられます。最近、子どものことをすぐに診断させようとしたがる教員が多いように思います。私が危惧するのは、障害名がついて「ほっとする心の内」があるのではないかと、ということです。子どもがみせる特徴的な行動を、「まあADHDだし仕方ない」などと納得してしまうと、「何とかしなければ」という思いがどっかに行ってしまう、子どもにかかわる問題の本質が見えなくなってしまうと思います。

普通学級に通う公立小中学生のおよそ6.5%が発達障害であるという調査結果が出ている今、この事例のように専門性を獲得することで対処しようとして、結果的に挫折してしまう先生は、きっと多いのではないかなと思っています。

私は、教職員にまず求められるものは、専門性などではなく、「子どもをまるごと受けとめる」と考えています。これは、同和保育・人権保育が大切にしてきた原則ですよ。同和保育・人権保育は、それまでの現場での経験に照らし合わせて、子どもたちがなぜそういう行動をとるのかを、一人ではなく職場のみんなと考えてきました。今日のテーマは、まずもってこの原則を外さないことが必須です。

みなさんの職場には、先生たちが安心できる居場所がありますか？相談できる人が隣にいますか？悩みをうちあけられて、それに共感し、寄り添う職員集団になっていますか？まずは、このことから考えてはどうでしょうか。



参加者のアンケートより

- ・愛着障害という言葉は聞いていましたが、具体的にどういうものか、ましてそれがいかに重要なことか講義を聞くまでわかっていませんでした。自園のクラスでも、厳しい家庭環境の子どもに、気になる行動が見られます。毎日手探りで保育・支援しているつもりですが、今日の講義を受けて、もっと深いところまでみていきたいと感じました。
- ・一人ひとりの行動や、行為の背景に着目していきたいと思いました。自分の周りに発達障害かな？と思われる子がいます。私は、この子のことを「何もできない子」と捉えていたかもしれません。話を聞いて、子どもの可能性を引き出せるよう、今後かかわっていきたいと思いました。
- ・色々な障がいの特性について説明をしていただいて、どの子も否定することなく、一人ひとりの子どもの世界や思いを尊重しながら、その子をまるごと受けとめていきたいと思いました。